

第 89 回山口西田讀書會（2015 年 9 月 26 日）

前回（88 回、2015 年 9 月 5 日実施分）の Protocol

出席者 12 人：佐野、岡田、桑原、杉山、谷、千葉、橋本、長谷川、福田、藤川、藤田、岡部

■第 1 編、第 3 章「意志」1-3 段落の概観

章の冒頭、純粹経験の立脚地より意志の性質を論じ、知と意の関係を明らかにするとの目的が述べられている。

第 1 段落【動作との関係】

意志は—

- ・動作を目的とし、動作をともなう
- ・精神現象であり外界の動作とは別のもの（動作がなくても意志は意志である）
- ・運動は運動感覚の連続であり、意志の目的も意識内の事実
- ・意志に内面、外面の区別がない

第 2 段落【心像から心像への推移の経験】

意志は—

- ・意志することは心像から心像への推移の経験に注意を向けること
- ・運動表象の体系に対する注意の状態

第 3 段落【運動表象の体系、知識表象の体系】

知と意の関係は—

- ・純意志であっても何らかの知識に基づく  
純知識もどこかに実践的意味をもっている  
（具体的精神現象はかならず両方面をそなえる同一現象）

■第一部 プロトコル報告

3 段落目の最後の文「これに反し——」以降が、意志が客観より働く場合がある、の意であることを確認したのち、「哲学的問い」に関して意見を交換した。

哲学的問いは、4 段落目の「真理とは我々の経験的事実を統一した者である」に関して、次の 4 つの論点に要約される。

- 1 ここに「我々の」とは個々のことか、集団か
- 2 個人の経験というものがあるのか。すでにあったものの反復では
- 3 全く新たな経験というものは、ほんとうにあるのか
- 4 我々の真理に対して「彼ら」の真理の存在余地は（西田哲学に）あるか

[1]「我々の」は個々か、集団か

ここでは個々の経験的事実の統一を述べている。読み進めると小なる統一から大なる統一に進むなど、我々一人ひとりが問題になっている。

【真理について言及した第1編、第2章「思惟」の第5段落（1-2-5）を参照】

「以上は心理学上より見て、思惟も純粹経験の一種であることを論じた」から「即ち最大最深なる体系を客観的実在と信じ、これに合った場合を真理、これと衝突した場合を偽と考えるのである」までを読んで、個々の意識体系が問題にされていることを確認した。

[2] 文化、伝承などのなかで生きる個人の経験は、ほんとうにあるのか

- ・それぞれにストーリーを作ることには理解できる。
- ・出発点である。長男と次男は別人格。
- ・自分の考える個人を超えたとき個人を意識する。
- ・信じない。疑わしい。
- ・おなじものを見ていると同じではない。

[3] 新たな経験（根底において自分を動かしているもの）は、ほんとうにあるのか

- ・個人の認識のなかにあるもの、まだ認識の周辺にあるものがあるのでは？
- ・所動（受動）的には新しい経験はあるが、深淵なところではもとあったもの。

【真理に注意して 1-3-4 のまとめ】

我々一人ひとりの経験的事実を統一したものが真理であり、それは個人的真理といえる。その統一（体系）はいずれ破れる宿命にあり、小なる体系から大なる体系へと進む。個人的欲求に終わりはしない。

ところが他方に無意識の領域も含めた真性の自己（理性的な自己）があり、そちらからの視点に転換することがある。転換は宗教においてよく見られる。どこまでいっても達成できない絶望（どこまでも大になり得ることは、どこまでも小を抱え込むことを意味する）、善であろうとしても善になりきれず悪を抱え込む。その絶望を転機として宗教的要求が生じ、ものの見方が変わる。

[4] 純粹経験それこそ文化的、思想的な背景からでていないか。哲学的立場に対する問いでもある。

- ・デルフォイの神殿には「汝自身を知れ」と掲げてあったが、それこそ究極の立場ではないか。
- ・「汝自身を知れ」のまえは？無文字の社会は哲学の対象外か。理解可能な伝統の外にいる人は？その限界に純粹経験が楔を打ち込んだのではないか。
- ・ソクラテスは著述を残していない。

## ■第二部 読書

1-3-4の「我々は常に過去の運動表象の喚起に由りて自由に身体を動かし得ると信じて居る」から「或いは意志的運動においては」の直前までを読了。

確認された疑問点、確認点は次のとおり。

- ・脊髄反射のように運動表象を伴っていない運動もあるので、意志との関連での運動を述べている。
- ・意志による運動も外界とおなじであるとの西田の主張は、ほんとうに納得できるものか。
- ・「原始的意識の状態」とは？→初生児の意識。宗教的には（追放されるまえの）樂園。

### ●哲学的問い

純粹経験の側より見たとき、個々の悩みや絶望の内容はどのような意味を持つのか。

能動的であるというのは運動の有無あるいは運動方向の有無であって内容、意味を問題にしていない。超越的な意識から見た個人（わたしという個別の意識体系）は悩み、苦しんでさえいればよいのか。

そこに何らかの方向（小より大）が与えられているとしたら、克服されないままの絶望、自殺（自死）はどのように位置づけられるか。自死もひとつの転換として位置づけられないか。

（筆記：岡部）